The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一体宗純の杜牧賛について
Author(s)	中本, 大
Citation	語文. 1990, 53-54, p. 36-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

一休宗純の杜牧賛について

中本大

序

一休宗純（一三九四～一四八一）の一代の詩偈集『狂雲集』には数多の詩人賛が収められている。これらは一休自身の詩作の傾向を顕彰するだけでなく、室町時代中葉の禅林詩壇の嗜好した唐土の詩文を知る上でも興味深い資料である。禅僧が祖述した古典たる唐宋の文人の中、一休の賛が最も多く認められるのは、晩唐の杜牧之と北宋初期の林和靖の二詩家である。本稿では、このうち杜牧賛を採り上げる。具体的には、第一に、賛の詩語の所出を確認し典拠詩及び典拠資料を検証する。それをふまえ第二に、そうした典拠が当代五山にあって、いかなる評価を有していたかを考察していく。その過程で、一休の大陸文学享受の系譜に関する問題を提示し、賛詩の特質を解明することを目的とする。

一

一休の杜牧賛に次の七絶がある。

賛杜牧(1)

1002 遮眼乾坤醉裏徒　眼を遮る乾坤醉裏の徒
無能懶性世間疎　無能にして懶性世間に疎なり
楊妃金穴風流寵　楊妃のみ金穴風流の寵
雨露君恩一滴無　雨露のごとき君恩一滴も無し

初句「遮眼」とは公案を典故とした禅語である。眼を閉じるという意味だけでなく、閉じたことによって見るともなく物の見えてくる境地を示す。以下、傍目には酔裏の徒の中にある不遇の杜牧に仮託して、その悲憤に自らの憂情を重ねた杜牧像を展開している。一方、構成的には、杜牧自身の詩作の語を忠実に踏襲し、自作に組み入れるという形をとっている。こうした詩文からの引用は一休の詩人賛に多く見られ、この作品の契機が特別であるわけではない。

今かりに、現在最も普及している、清代の馮集梧が注を施した『樊川詩集注』を繙くと、この賛の発想は、第二巻の冒頭に収められた「華清宮三十韻」という五言古詩、中でも特に「雨露偏金穴、乾坤入酔郷（雨露金穴に偏く、乾坤酔郷に入る）」の一連に拠ったものであることがわかる。杜牧のこの排律は、中唐以降晩唐にかけて流行した「宮詩」、特に玄宗・貴妃の悲恋を題材とするものである。労作ではあるが、この詩語を含め特に個性的な表現というわけではない。しかし『狂雲集』所収の杜牧賛八首の中でこの七絶が注目されるのは、一休がこの排律をいかなる資料によって検索し得たかという、典故の問題を提起してくるからである。

時代及び選集名 ＼ 詩題	華清宮三十韻	将赴呉興云々	江南春絶句	題禅院	赤壁	泊秦淮	題桃花夫人廟	贈別	遣懐	歎花（悵別）	兵部尚書云々	途中一絶
（唐）												
又玄集						○						
才調集			○		○	○		○	○			
（宋）												
唐文粋												
文苑英華	○	○		○		○						
楽府詩集		○										
詩林広記		○			○				○	○	○	
唐詩紀事									○	○	○	
万首唐人絶句			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
後村千家詩			○							○		
唐詩絶句					○	○						
唐三体詩		○	○	○	○	○						
唐詩鼓吹（金）												
（元）												
唐宋千家聯珠詩格					○			○	○	○	○	○
瀛奎律髄												

一休の典拠資料を探るべく、『狂雲集』中の杜牧賛八首及び題詠詩等の詩語で、管見により、杜牧詩に拠ったと思われるものの詩題と掲載総集をまとめたのが上の表である。譚黎宗慕編撰『杜牧研究資料彙編』及び、山内春夫氏著『杜牧の研究』を参考に、時代別に一覧している。

この表からも、典拠詩は『詩林広記』『三体詩』『聯珠詩格』といった、唐宋の主要詩人の作を集めた手軽な選集に見出せるものが大部分を

占める。

樊川子杜牧の詩文はその物故後、甥の裴延翰により『樊川集』として唐代に既に集成されている。更に、杜甫の「老杜」に対して「小杜」の称の冠せられた宋代には、『樊川別集』（田槩序）も編まれ、大部分の詩文を網羅することになる。しかしこの両代の全集は佚書となっており、今日では、宋版に倣って明代に編纂された四部叢刊本によって、宋代刊本の輪郭を辿るに留まる。だが一休詩の典故を見る限り、こうした別集に拠ることなく、簡便に机辺で参照し得た表の如き選集によったと考えることも可能である。ところが前掲「華清宮三十韻」詩のみは、その詩型があまりに長篇であったため、絶句・律詩の近体詩に限定された選集等には択られることはなかった。唯一、編纂当時までの詩作を広く集めた総集『文苑英華』に採録されるのみである。

『文苑英華』は一千巻にものぼるまさに大系である。その撰者である李昉は『太平御覧』『太平広記』ら、我が国禅林で渇望してやまなかった宋代類書最高峰の主要編者でもある。こうした博学によって『文選』につぐ漢詩大系として完成されたこの集も、大陸の学問・文学に強い関心を抱く遠い扶桑の禅僧らに影響を与えなかったわけがない。芳賀幸四郎氏も指摘されるように、(2)『蔭涼軒日録』延徳元年十月二十四日の条には、『文苑英華』が禅僧らの間で話題になっていたことが窺える。

…前略…曾禪昌院殿來訪之時。話及二太平御覽之事一。愚云。千卷書有二三部一。御覽其一也。禪問曰。自餘二部如何。答云。册府元龜。文苑英華也。皆千卷書也云々。昨日於二大德一禪昌院殿曰。文苑英華沽却者有レ之。持レ之供二諸老一覽一。見レ之以二九十卷一。終禪昌責レ愚云。此書千卷有レ之由。以前物語有レ之如何。愚云。必有二千卷一。書レ之書有レ之。禪昌問二小補春陽一曰。有二千卷一。有レ之否。二老皆不レ識云々。想愚妄語也。今日擇二曾所レ記者一有レ之。事文類聚有レ之云々。乃引二事文類聚別集第二卷一有レ之。命二昌子一寫レ之。贈二禪昌院一。…以下略…

この記述を読むかぎり、この大部の書が禅林に普及していたとは考えられまい。売却されようとしていた九十巻の書籍が、実際『文苑英華』の一部であったのか否か確認する術を文中に求めることはできない。しかもこの延徳年間（一四八九～一四九二）は一休没後である。その生涯の早くに、学術・文芸及び出版の中心であった五山から離別して林下の寺跡に留まり、更に応仁の乱前後という、京洛の最も荒廃した中にあった一休が、学問の最先を競う叢林で話題にのぼり始めた貴重書を閲覧し得たか否か、やはり大いに疑問である。

また、中世五山の最末期に二度の入明経験を持つ策彦周良（一五〇一～一五七九）の、作詩文の参考としての談話書留である『蠡測集』にも、『文苑英華』が引かれていることが既に指摘されている。(3)しかし室町時代後期の数少ない渡明経験者の一人である策彦師の読書圏を、本国にあてはめることは早急に過ぎよう。また、策彦の時代もやはり一休からはかなり降っている。

事実、当時書籍の入手がいかに困難であったかを物語る一例を、一休の行実を記した『東海一休和尚年譜』(4)の中に見出すことができる。

師八十三歳。四月瘧疾少發。五月望有二人獻二韻府數册一。師獲而喜甚。語二左右一曰、此册襄豫與二華叟先師一、有二少逆一而辭去、歸京途中、遇二讚堅者一、華叟師俗姪也（割注）。曰、子今何之。

師件々縷説辭意。堅者携レ師歸、再謁ニ先師一。々曰、來也、你辭レ吾出去、何爲留レ書、無乃眷戀之至乎、撫愛倍レ舊。後霜雨浹レ旬、崖崩損ニ菴窓一、書蝕ニ土中一、冊數不レ全、泥痕猶存而書卷破、此其驗也、今幸屬レ餘、吁天哉、物歸レ有レ主、披而一覽、宛如レ見ニ先師再謁時之面一。仍拜書ニ一偈於外裝紙一、以爲ニ家寶一。誡ニ諸子一曰、莫ニ敢失一也。…後略…

右は『年譜』文明八年、一休八十三歳の条の記述である。『韻府』とは『韻府群玉』のことであろう。『韻府群玉』は現存伝本も比較的多く、川瀬一馬氏『五山版の研究』を筆頭に、管見で触れ得た当時の漢籍刊行書目を参考にしても、南北朝期に刊行されて以来、虎關師錬の『聚分韻略』と並んでおそらく禅林で最も普及した韻書、漢籍であった。応仁の乱以降、戦火のために多くの書物が烏有に帰したことを考慮しても、入手しやすかった韻書にあってかくの如き状況であったことを鑑ると、更に稀少価値の高い類書であれば、手の届くものでなかったことは間違いなかろう。

二

では一休は何によって「華清宮三十韻」詩の詩句を引いたのであろうか。即結論を述べるならば、一休は詩集に拠ったのではなく、中国宋代に全盛をみた詩文評論書・詩話類によったものと考えられる。中世禅林での宋代詩論の享受は、芳賀幸四郎氏の御指摘が既にある。[5] その受容の非常に活発であったことは、往時の抄物の引く詩話の言辞の頻しさからも明らかであろう。

一例をあげれば、本国禅林の『三体詩』注疏の諸説を俯瞰し得るものとしてその存在意義の大きい、幻雲月舟壽桂（一四七〇～一五三三）の『三体詩法幻雲抄』（内閣文庫蔵本）の引用書目には、三史から旧新唐書までの史書や『資治通鑑』等の百科全書が見られる一方、『竹坡老人詩話』『許彦周詩話』『珊瑚釣詩話』などが実に多岐に広く見在するのである。しかしこれらの詩話は『百川学海』等の叢書の中に収められているもの、更に簡便には、北宋の詩話を集成した胡仔編『苕渓漁隠叢話』を出所とする孫引も多く、個々がどの程度読まれていたかは今一つ詳らかではない。

一休も詩話類を閲していたのは確かである。『狂雲集』には「読冷斎夜話、有褒禅山石崖僧之一件事、感而題之（冷斎夜話を読むに、褒禅山石崖の僧の一件事有り、感ありて之に題す）」という七絶の連作三首がある。

530 仏印重荷一百夫　仏印重く荷う一百夫
佳名道価満江湖　佳名道価江湖に満つ
石崖一箇野僧意　石崖一箇野僧の意
仏法南方一点無　仏法南方に一点も無し

531 玉帯咲泥如上欺　玉帯咲ひ欺くこと土泥の如し
路頭喧吠犬兼雞　路頭喧すし吠犬と雞と
天下老禅奈慚愧　天下の老禅慚愧を奈んせん
獄中天沢世皆乖　獄中の天沢世皆乖く

532 百丈絶食無人学　百丈絶食するも人の学ぶ無し
薬山両粥黄菜麦　薬山の両粥黄菜の麦

但居門外弊衣徒　　但だ門外に居す弊衣の徒
金襴道光開法席　　金襴の道光法席を開く

『冷斎夜話』所引の一説話をもとに、白蓮社系の青松社の社主であり蘇東坡とも親交のあった仏印了元や、後世の公案で知られる清貧を貫いた薬山惟儼らを材としたこの詩偈は、名利に走る禅門の徒に対す一休の憂情が警鐘となって伝わってくる作である。この『冷斎夜話』は、北宋、元祐党派の詩僧である釈恵洪（覚範恵洪）の手になるもので、『許彦周詩話』らと共に比較的早期に成立した詩話の代表的なものである。本国でも、鎌倉時代末期以降刊行が重ねられ、五山にも広く普及していた。一休が詩作に利用していたのも諾けるところである。

一方、問題たる杜牧『華清宮三十韻』詩は、『許彦周詩話』に一連が引かれ次のように評論されるのである。

小杜作華清宮詩云、雨露偏金穴、乾坤入醉郷、如此天下焉得不亂。

彼書の引くこの両句は、一休が用いた詩句と完全に一致している。許顕著『彦周詩話』は、宋の左圭編の叢書『百川学海』にも全文が掲載される。また前出『三体詩法幻雲抄』にも縷々引かれることから、禅林の学僧にとって最も馴じみ深い書籍の一つであったことがわかる。だが、この杜牧詩の論評に関しては、直接『彦周詩話』から引用したとするより、更に参照の簡便であった『詩人玉屑』に拠ったとして差し支えあるまい。

南宋の魏慶之編『詩人玉屑』が我が国中世の文壇全体に大きな影響を与えたことは、小西甚一氏・増田欣氏らによって既に言及されている。[6] こと五山詩壇においても禅僧の詩文の嗜好を決定付けた点、即ち唐代の李白・杜甫、宋代の蘇東坡・黄山谷を詩人の至高とした南宋期詩論を集大成したものとして、看過できないものである。そればかりでなく、詩話を中心として、史書・小説などから詩作の指針となる言説を抜きだして編集された此書は、実作の手軽な手引書として五山で広く利用されていた。この『詩人玉屑』巻第十六、杜牧之の詩作に関する記述を集成した部分の第五項目に、前掲『許彦周詩話』から引用した『華清宮三十韻』の詩句についての記述が、原典そのままに収められているのである。おそらくこれらの記述に裏付けられ、杜牧詩における「天下混乱」の描写として、一休は自らの詩語に用いたのだろう。

一休の杜牧像と『詩人玉屑』を中心とする宋代詩論での鑑賞・評論との関連はこの一例に留まらない。例えば前掲「賛杜牧」七絶の承句、

無能懶性世間疎　　無能にして懶性世間に疎なり

は『三体詩』にも収められた牧之の「將赴吳興登樂遊原一絕（將に吳興に赴かんとし樂遊原に登る一絕）」詩の初句、

清時有味是無能

によったものである。政道正しき世に埋もれる自らを「無能」と嘲する杜牧である。しかし宋代にあってはこの詩句も反語として捉えられ、『清華宮三十韻』排律同様、杜牧の当世への不満が吐露されたものと理解されるのである。紹述党派の論客、葉夢得の『石林詩話』はやはり『百川学海』に全文が見える漢籍である。此書では「將赴吳興云々」詩を全て引用して、

此蓋不滿於當時。

と評論しているのである。この記事は、前出『漁隠叢話』にも取り

上げられており、『三体詩法幻雲抄』でも『漁隠叢話』からの出典であることを示して、『石林詩話』の説を披露している。この七絶自体『三体詩』中の著名な作ではある。しかしこうした解釈が付されたのも宋代文壇によってであった。尚、この一句は一休の特に共感する表現となる。文安元年の大徳寺僧囚禁事件の感懐を述べた「文安丁卯秋、大徳寺精舎有一僧、無故而自殺矣云々」九首連作の第八篇転句にも、

無能有味狂雲屋　無能味有り狂雲の屋

自らを形容する文辞として更に直截に詩語を引用している。

更に、宋代詩論の影響の見える一休の賛詩の例を二首示しておく。

508 杜書記独朗天然　杜書記独朗天然
参得正伝臨済禅　参得す正伝臨済の禅
欲隠弥彰狂語笑[7]　隠さんと欲して弥よ彰る狂語の笑
多盃醉後紫雲前　多盃醉ひて後は紫雲の前

（「賛杜牧」）

起・承句、詩人を禅者に譬えるのは、禅宗に強い関わりをもつ東坡や山谷を賛する場合だけでなく、[8]一休が好んだ詩人によく用いる修辞である。そして転・結句、北宋、張戒撰『歳寒堂詩話』に引かれ、『聯珠詩格』にも収められた杜牧「贈別」詩の起承句、

多情卻似總無情　惟覺罇前笑不成

に顕れた奚川子の覚醒した真面目さと、「兵部尚書席上作」（『詩林広記』等では「李司徒席上」となす）詩に見られる、

忽發狂言驚四座

の放埒・諧虐を対比させ、杜牧の天真爛漫な姿を表現するのである。この絶句の典拠となった「兵部尚書席上作」詩に、牧之と妓女紫雲との逸話を引く解釈もまた、『詩人玉屑』に見られるのである。同書、杜牧之の第九項目には『古今詩話』と注記して、唐の孟棨撰『本事詩』以来記された杜牧の監察御史（東都分司）時代、洛陽にあった頃の逸話を伝えている。

牧之爲御史、分司洛陽。事李司徒罷鎮閑居、聲妓爲當時第一。一日開筵、朝士爭赴、以杜嘗持憲、不敢邀飲。杜諷坐客達意、願預斯曾。李馳書、杜聞命遽來、曾中女妓百餘、皆絕色殊藝、杜獨坐南行、瞪目注視、滿引三巵、問李曰、聞有紫雲者孰是、李指示之、杜凝睇良久、曰、名不虛得、宜以見惠。李俯首而笑、諸妓亦皆回首破顔。杜又自引三爵、朗吟而起、曰、『華堂今日綺筵開、誰喚分司御史來、忽發狂言驚滿座、兩行紅粉一時回』、意氣閑逸、旁若無人。

（『詩人玉屑』巻之十六）

この艶事は次掲、蘇東坡「聞李公擇飲博國博家大醉」連作にも採られる。

不肯惺惺騎坡廻　玉山知爲玉人頽
紫雲有語君知否　莫喚分司御史來

一休詩の引く「紫雲」が杜牧の詩語からだけでは解釈できないことがわかる。

また同じく「賛杜牧」に次の七絶がある。

1001 楊州雲雨十年情　楊州雲雨十年の情
情淨無求儒雅名　情淨くして儒雅の名を求むる無し
禅榻消愁鬢糸雪　禅榻愁ひを消す鬢糸の雪
落花風与一身軽　落花風と与に一身軽し

この賛は、小杜の著名な「遣懐」詩及び『三体詩』にも採られた「題禪院」詩の詩句から発想を得たものである。今日でも人口に膾

炙したこの二詩の中、「遺懐」の製作契機が『楊州夢記』に見える艶事であることを指摘するのも胡仔『漁隠叢話』であり、『詩人玉屑』はこの記述を踏襲、掲載しているのである。

以上の例だけではない。各史書・小説類にまとめられた杜牧に関する逸事や艶事が整理され、詩作の典拠として指摘され集められたのは、悉く宋代、特に南宋から元代初期にかけての文壇であった。しかし逸話・艶話に紙数を割く一方、「赤壁」を筆頭とする詠史詩の好異性（『漁隠叢話』）――小説的情趣の豊かな空想を、新しい歴史の場面に詠む（山内春夫氏『杜牧の研究』）――をも指摘し、杜甫に比されるほどに国家への憂情や悲憤を主張したとして、杜牧詩を正当に評価することも宋代詩論の特色である。そしてこれらが『詩人玉屑』に見られる多彩な記載を生むことになっていった。こうした杜牧の多面性を認識した上で詩作の解釈は、一休の杜牧賛にそのままあてはまるものである。つまりその賛詩は『詩人玉屑』を中心とする宋代詩論の枠組の中で作り上げられたといっても過言でないのである。

南宋末期には、日本の中世禅林で最も広く読まれた『三体詩』が周弼によって編まれている。この当時の唐土の詩壇の傾向は、吉川幸次郎氏の『宋詩概説』に詳しく、次のように述べられている。

宋詩さいごの時期である十三世紀、南宋はもはや大詩人を生まない。そうして小詩人と、それによる小さな詩とに充満する…中略…これまでの宋詩のように、深遠な理知の詩を維持することがはっきり困難となり、唐詩の平明な抒情への復帰が、いよいよ顕著となる。…中略…趙師秀の編んだ唐詩の選本「衆妙集」は、同輩の詩人の作詩を手本としたのであろうが、唐初の沈佺期から王貞白まで、七十六家二百二十八首、大半はあっさりした五言律詩である。李白、杜甫、韓愈、白居易などの大家を収めないのは、鬼神を敬して之を遠ざけたのであろう…後略…　（第六章）

蓋し、詩作と評論の間にかなりの隔たりのあることが詩壇の特色だったのである。『三体詩』にあっても収録詩人中、最多の作品が採られている杜牧は、一首も収められない李白や杜甫よりも高く評価されていたわけではなく、中晩唐の群小詩人の一人として扱われたに過ぎなかった。李杜蘇黄に比して評価に差の有ることが当然であった。本国叢林においても『三体詩』は童蒙のための暗誦用テキストとして、初学向けに用いられたわけである。こうした中で一休が、充分な評価を獲得しているとは言い難い杜牧像を、詩論及び人物論によって形成していったことは注目すべきことである。

三

次に、こうした一休の杜牧像形成の過程を、応永年間（一三九四～一四二八）前後の五山詩僧との比較によって考えていく。

一休のみならず、五山叢林で晩唐詩がこよなく好まれたことは、江西龍派の『續翠詩藁』に収められた次の七絶からも理解できる。

秋夕留客論詩　　江西龍派

點檢平生古錦囊　　點検す平生古錦の嚢
十篇九是寫愁腸　　十篇九是れ愁腸を寫す
與君明日又離別　　君と明日又離別す
竹院秋聲話晩唐　　竹院の秋聲晩唐を話す

この作品は、単に晩唐詩が広く日本にもたされていたという事実だけでなく、晩唐の作家の描く世界に強く誘慕されるものがあったことを吐露しているように思われる。この晩唐の主要詩人の一人である杜牧に親しんだことの知られるのが、義堂周信（一三二五～一三八八）絕海中津（一三三六～一四〇五）の両雄、そしてその薫陶をうけた江西龍派（一三七五～一四四六）以下、建仁寺の友社に属していた詩僧らであった。中でも五山文壇の指導的立場にあった絕海と、やはり主要詩僧で、一休ともほぼ同世代に生きた瑞溪周鳳（一三九一～一四七三）の二僧には、各々『杜牧集』を詠じた七絶がある。その二首をあげる。

讀杜牧集　　絕海中津

赤壁英雄遺折戟　　赤壁の英雄は折戟を遺し
阿房宮殿後人悲　　阿房の宮殿に後人は悲しむ
風流獨愛樊川子　　風流獨り愛す樊川子
禪榻茶烟吹鬢絲　　禪榻にて茶烟鬢絲を吹かす

（『蕉堅藁』）

讀樊川集　　瑞溪周鳳

綠陰著子三年晩　　綠陰著子するも三年晩し
紅藥開花十里春　　紅藥開花す十里の春
落魄江湖天有意　　落魄江湖天に意有り
兩邦風物待詩人　　兩邦の風物詩人を待つ

（『臥雲稿』）

絕海の作は、牧之の著名な詩語を引いてその情景を賛したものである。往時から杜牧を詠じたものとして代表的な作であったらしく、『花上集』にも採録されている。一方、瑞溪の作は、散り落ちてしまった花、訪ねることのできなかった花への遺憾の念を率直に綴った「悵別（歎花）」詩の結句、「綠葉成陰子滿枝」の光景と、「江南春絶句」の初句、「千里鶯啼綠映紅」の如き花盛る春の喜びを詠じた光景とを対比させる。そして江湖に流落し、自然の中を意の向くままに生きた風流な杜牧という詩人があったからこそ、両地の明媚な風物も詩に認められ、永代伝わっているとするものである。

さて今解釈以上に問題にすべきは、この二首の詩題である「杜牧集」をどう捉えるかということである。中世禅林の別集受容のあり方に関わる重要な事柄である。以下資料を用いて考察を加えることにする。

禅林『三体詩抄』の一、蓬左文庫蔵、室町末期写本で村庵希世霊彦（一四〇三～一四八八）述と見られる『聽松和尚三体詩抄』中の「江南春」絶句の注釈には、

村云、此ノ詩之題ハ、杜牧カ、樊川集ニハ、江南道中ノ春望ト、アル也、其ノ詩ニ合テ好キソ

別集との異同が指摘されており、『樊川集』の存在が示されている。月舟『三体詩法幻雲抄』でも同詩、希世の説としてほぼ同様の記述を掲載している。しかし管見では『樊川集』の称の見えるのは、両書ともにこの部分だけである。

逆に別集の披閲を懐疑させる要因は多い。成立以来作者表記に混乱の多い『三体詩』にあって、今日では許渾の作として一致を見ている「秋思」詩を、雪心素隱『三体詩素隱抄』では、

此ノ詩ハ、牧自感老之詩ソ。又已カ習愛之衰タル時ノ作トモ云ソ

と注記し、その根拠を示さないのは論外として、前出『幻雲抄』で

も同詩、

杜牧カ詩ト云義モアリ先渾ト云カ好イソ詩林万選ニハ豪放体ニ出タソ渾カ丁卯集ニモ載タソ

と検証しているものの、杜牧の別集『樊川集』を比較本文に用いることはしていない。許渾の別集『丁卯集』が文中、多々引かれることとは扱いに歴然たる差異が見られる。そうした態度は、同書所収「送隱者」詩での注記によって明らかである。当時、許渾として通用していた此の七絶の作者を『幻雲抄』では杜牧であるとする。月舟は『丁卯集』に載せられないことを確認した上で、その根拠を杜牧の別集ではなく、『漁隱叢話』や明代の『唐詩正音』『唐詩遺響』なる詩話や韻書、選集に求めているのである。また「江南春」絶句で別集を参照した『聽松和尚抄』では同詩、許渾作に何ら疑問を呈していない不可思議さがある。

右例以外にも杜牧の作品、就中韻文には異同が多い。前掲、瑞溪詩では承句を「十里春」に為す。しかしこれを「千里」の誤写と考えるのは正鵠を射ない。「江南春絶句」初句を、

十里鶯啼綠映紅

とする本文もあった。南宋、劉克莊輯『分門纂類唐宋時賢千家詩選』がそれで、俗に『後村千家詩』とよばれるものである。編者の劉後村は、五山でも読まれた『後村詩話』を著した詩家でもある。その『後村詩話』では杜牧を許渾と比した後、『樊川集』版本についても次のように述べる。

杜牧許渾同時、然各爲體…中略…二人詩不著姓名亦可弁、樊川有續別集三卷、十之八九皆渾詩、牧佳句自多、不必又取他人詩益之、若丁卯集割去許多傑作、則渾書無一篇可傳矣、牧仕宦不至南海、別集乃存南海府署之作、甚可笑。（前集一）

唐土では宋代、『樊川集』の『續別集』なる三巻の詩集も存在していたものの、錯簡の夥しいものであったらしい。彼辺の事情は放翁陸游の『放翁題跋』に更に詳しい。『樊川集』への跋文に云う。

唐人詩文、近多刻本、亦多經校讐、唯牧之集誤謬特甚、豫毎欲求諸本訂正而未暇也。書以示子遹、尙成吾意。開禧丙寅十一月廿七日、放翁書。

多くの別集の中で、杜牧集の版本には特に問題のあったことがわかる。宋代の選集の幾つかの誤謬の要因、特に許渾詩との混同にはこうした背景があった。当然、本国禅林でもこうした認識が踏襲されたはずである。『樊川集』の渡来していた可能性は大きい。しかしその本文評価に、他の作家以上に詩話や選集の用いられる必要があったのである。

こうした事情からか、禅林では杜牧の目立った受容は見られない。その賛詩の『翰林五鳳集』への採録も、賈島や李賀ら他の晩唐の詩人に比べ決して多くない。その中で杜牧詩の影響が絶海ら建仁寺友社周辺の詩作に見在していることは、一休との関連から特に注目される。絶海と並ぶ両雄の一、義堂周信の作にはその最も早い時期の例をみることができる。

墨竹　　義堂周信

活寫亭々水玉姿　　活寫す亭々たる水玉の姿
多情好在晩晴時　　多情好在なり晩晴の時
不才自笑無詩賦　　不才自笑す詩を賦すこと無きを
慚愧風流杜牧之　　慚愧す風流の杜牧之

（『空華集』）

絕海より十歳ほど年長の義堂の作は、墨竹画への賛に杜牧を詠み込んだものとして注目されるものである。起句は、画筆の素晴らしさを讃えたもの。その竹の世界に自らを置いた時、風景に喚起された詩情を詩句に結実させることのできない不甲斐なさを、風流な杜牧との比較でとりなしたのが承句以下である。詩題「墨竹」は叢竹に俗叟の姿をあしらったものか、図柄は不詳である。だがこの七絶の解釈は、杜牧と墨竹画の関わりにおさえるよりも、承句以下の義堂の心情の中に杜牧像を探る方が的確であろう。この作には、既に言及した杜牧「贈別」詩の影響が大きい。

贈別　杜牧

多情卻似總無情　惟覺樽前笑不成
蠟燭有心還惜別　替人垂淚到天明

義堂は、起句に見える杜牧の諦観に強く傾倒し、結局は情を捨てきれていない己を「自笑」しているのである。義堂は「自笑」という詩語をしばしば自作に用いている。杜牧詩の影響を考えてもよいだろう。

こうした先達の薫陶をうけ、本国禅林での杜牧詩享受は江西龍派をもって一応の集成を見たといえる。義堂・絕海から一世代後の江西は、玉村竹二氏も一休の文学的啓蒙者と想定された、応永期の代表的詩僧である。[9] その詩作に見える杜牧像は数少ないものの、先人に比して多彩である。

讀阿房宮賦　江西龍派

阿房高秀蜀山嶺　複閣重樓勢接天
小杜臥吟禪榻外　楚人一炬煮茶烟

阿房高秀たり蜀山の嶺　複閣重樓勢は天に接するがごとし
小杜臥し吟ず禪榻の外　楚人の一炬に茶烟を煮す

右は、杜牧の傑作で『古文真宝』により広く知られた「阿房宮賦」を題材にしている。『續翠詩藻』等江西の別集には見られず、『翰林五鳳集』により知られている。起承句でその賦作の場面を詠じ、転句で作者の風流な姿に視点を転じる手法は、絕海に一致している。結句、「題禪院」詩の詩語を引くのも同一である。こうした筆致は、やはり『翰林五鳳集』に収められた仲方圓伊（一三五四～一四一三）の同題詩とは異なるものである。

讀阿房宮賦　仲芳圓伊

水壯山雄百二秦　水壯にして山雄たり百二秦
咸陽宮闕照天新　咸陽宮闕照天新たなり
宣州老守誅奸筆　宣州の老守誅奸の筆
又使後人哀後人　又後人をして後人を哀しましむ

転句の厳しさは江西詩にはない直情的な表現である。

こうした杜牧像を描いた江西の真意は次の詩作により明らかになる。

芍藥　江西龍派

黃鵠何年啣一枝　黃鵠何年か一枝を啣へ
廣陵紅藥落天涯　廣陵の紅藥を天涯に落とせり
東風憶著杜書記　東風に憶著するは杜書記
醉捲珠簾鬢似絲　醉ひて捲く珠簾鬢絲に似たり

宋代、劉攽・王観著す両『芍藥譜』以来、芍藥は江南揚州を代表する景物である。この七絶の情景は陸亀蒙の連作「春思二首」詩による。

竹外麥煙愁漠漠　短翅啼禽飛魄魄

此時憶著千里人　獨坐支頤看花落

江南酒熟清明天　高高綠施當風懸
誰家無事少年子　滿面落花猶醉眠

この二首は江南の風景を詠じたものとして、杜牧詩の類詩として禅林で膾炙していた。亀蒙の描く江南の景の中、江西の憶著したのはやはり杜牧であり、その詩作「江南春」であった。芍薬は古くは『詩経』鄭風「溱洧」詩により男女の思情を象徴する花でもあった。放埒な杜牧像に相応しい詩題である。だが江西は花盛る江南の地に安逸を貪る杜牧を意図しない。『三体詩法幻雲抄』では「江南春」詩注に江西の説を引いた希世の講を載す。

村講云続翠ノ義ニ上ヘハ述春望之景下ノ心ハ杜牧有才不被用〻人ノ幕下ニ居ホトニ腹立〻書ソ酒ウチ飲テ寺ニ遊テ可送…下略…

才あれど世に用いられぬ憤懣の顕れた作と見るのである。江西は杜牧の詩作を不遇の士の憂情と解す。しかしその姿は昔日の放蕩と老後の諦観とで内包され、外には顕れない。これは一休の杜牧像とも密接に繋がる解釈である。

尚、芍薬に杜牧を併せ詠ずる例は南江宗沅にも見られる。『花上集』に採られ、膾炙したであろう「未開芍薬」詩の一二句には、

楊州風物故人詩　楊州の風物故人の詩
我有一叢添髩絲　我に一叢の髩絲を添る有り

とあり江西詩に類似する。前掲瑞溪詩にも「紅薬」の語が見える。やはり建仁寺友社周辺で敷衍された詩題であろう。

江西の杜牧賛はこの一作に留まらない。杜牧の逸事を材にしての次の七絶も注目される。

春湖水嬉　江西龍派

官船載妓鬧清晨　官船に妓を載し清晨に鬧す
柳色初深湖上春　柳色初めて深し湖上の春
幕府少年無杜牧　幕府の少年杜牧をおいて無く
多情黄鳥莫藏身　多情の黄鳥身を藏すこと莫し

（『續翠詩藁』）

「芍薬」詩同様、風流を主題に詠じられる。

この七絶の典拠は、『詩人玉屑』にも掲載された『麗情集』なる書物の次の説話に求められる。

太和末、杜牧自侍御史出佐沈傳師宣城幕、雅聞湖州爲浙西名郡、風物妍好、且多麗色、往游之。時師史崔君、亦牧之素所厚者、頗諭其意、凡籍之名妓、悉爲致之、牧殊不愜所望。崔君復候其意、牧曰、顧得張水戲…中略…至日、兩岸觀者如堵、迨暮、竟無所得。將罷、忽有里姥引、髫女、年十餘歳、牧熟視之、曰、此眞國色。…中略…吾十年必爲此郡、若不來、乃從所適。因以重幣結之。…中略…大中三年、移授湖州刺史、此至郡、則十四年所約之姝、已從人三載、而生二子焉。…中略…牧詰其母曰、曩既許我矣、何爲適人、母拜曰、向約十年不來而後嫁、嫁已三年矣。牧俛首曰、詞也直、强而不祥、乃禮而遣之。因爲悵別詩曰、『自恨尋芳到已遲、往年曾見未開時、如今風擺花狼籍、綠葉成陰子滿枝』…中略…故東坡將之湖州、戲贈莘老詩云、『亦知謝公到郡久、應怪杜牧尋春遲。髩絲只可對禪榻、湖亭不用張水嬉』

（『詩人玉屑』巻第十六）

原文にも引かれている「悵別（歎花）」詩の由来を、若かりし杜牧が湖州で舟遊びを催した折、一人の少女を所望し、十年の後に再びこの地に刺史として赴いた時、手に入れんことを約束したが、果たせなかったことを歎いたものだとする内容である。この物語は『揚州夢記』等他書にも引かれ、杜牧を語る上での有名な逸話であったことがわかる。禅林では、文中引用される湖州を詠んだ蘇東坡の七言詩「將之湖州。戲贈莘老（将に湖州に之かんとす。戯れに莘老に贈る）」によっても親しいものであった。

將之湖州。戲贈莘老　蘇東坡

餘杭自是山水窟　灰聞吳興更清絕

……中略……

亦知謝公到郡久　應怪杜牧尋春遲

鬢絲只可對禪榻　湖亭不用張水嬉

最尾二連、江西詩とは「悵別」「遺懷」詩等、引用の詩語まで一致する。東坡の鑑賞の影響を受けての詩作であった可能性も大きい。

以上、応永期前後の禅林詩壇の杜牧の別集受容と、当時名を馳せた建仁寺周辺の詩僧の作品を検索してきた。東坡詩の影響もあってか杜牧像は「風流」として捉えられることが圧倒的であった。その中で江西は既成の詩句に新解釈を施そうとした点で重要である。しかし江西と雖も『詩人玉屑』等で筆を費やされた一面から脱却し得ない。老杜に対する小杜としての本領である社会性や、歴史論者としての側面への関心は希薄で、いわゆる「艶話」ばかりが強調された観がある。杜牧像に新たな評価を見出した独創的な詩作はやはり少なく、「婬色」としての姿に類型化される弊害が生まれつつあったといえる。

四

しからば、こうした類型に留まらず、多角的視野で杜牧を賛した一休の傾慕にはいかなる影響が考えられるのであろうか。他の五山詩僧との交渉が確認されない今、そこに南江宗沅（一三八七～一四六三）との交友が強くはたらいていたことを無視することはできまい。

南江は唯一、一休との交友が確実視される五山の学僧である。詩作を江西龍派に学んだことが相互の詩集によって知られている。南江が五山に住持した後出奔し、一休に兄事したことは、先達の方々によって既に繰り返し述べられているため、ここでは省略する。[10]しかし出奔後、南江の優れた五山詩僧としての名声が叢林で後代も保たれていたことは、横川景三撰『百人一首』や、横川命名の『花上集』、更に近世初頭、金地院崇伝らの撰した『翰林五鳳集』への作品の採録より確認される。その南江が、王維詩とともに杜牧詩を尊んでいたことが『蔭涼軒日録』延徳四年二月十一日の記事から推量される。

…前略…夜來九峯來。打話園ㇾ爐勸ㇾ盃。峰話云。南江翁曾語ニ天隱和尚ニ云參ㇾ詩須ㇾ參ニ王維杜牧詩。…後略…

天隱龍澤に語ったという南江没後のこの記事は、彼の死後も禅林において、その名声が維持されていたことを確認する資料ともなろう。

しかしこれほど杜牧詩を尊んだ南江の詩題や詩句にその影響を見出すことは難しい。前掲「未開芍藥」詩の他には唯一、国立国会図書館所蔵鶚軒文庫の『鷗巣瞻稿』に「茶園落花圖」という七絶で見

られるのみなのである。

茶園落花圖　　南江宗沅

童子湘茶鶴避烟　　童子は茶を湘し鶴は烟を避く
僧簾風渡落花前　　僧簾風渡る落花の前
一吟愁殺杜書記　　一吟愁殺す杜書記
憶向春樓報夜全　　憶ひ春樓に向ひて夜全に報ず

詩題「茶園」は茶烟に通じる。前掲、杜牧の「題禪院（醉後題僧院）」詩の結句、

茶烟輕颺落花風

を具象化したこの詩材は、江西龍派『豯庵集』所収、管領細川満元の薨去を悼んだ次の七絶、

花下感舊岩栖作[11]　　江西龍派

人間萬叟轉頭空　　人間萬叟轉頭するも空し
春夢無蹤古寺中　　春夢蹤も無し古寺の中
當日擧杯人不見　　當日杯を擧ぐるも人見えず
殘僧獨立落花風　　殘僧獨り立つ落花の風

とも一致するものである。禪院・僧院という共通点からか、牧之「題禪院（醉後題僧院）」の詩句はこれらの他にも本国五山で多く転用されており、個性的な作詩ではない。しかし杜牧詩と南江宗沅の関連を無視できないのは、両者の詩作の次の共通項に注目されるからである。即ち、「落魄江湖」の思いなのである。

遺懷　　杜牧

落魄江湖載酒行　　楚腰腸斷掌中輕
十年一覺揚州夢　　贏得青樓薄倖名

「落魄江湖」は右掲、杜牧「遺懷」詩の起句に見られる詩語である。その解釈は、古く『揚州夢記』等で人口に膾炙した妓楼の遊蕩児たる牧之の追憶の詠となす。一方、『詩人玉屑』と並んで広く読まれた、元代、于濟編『唐宋千家聯珠詩格』の「用十年字格」項に劉禹錫「宿都亭」詩や杜荀鶴「哭貝韜」詩と共に収められたこの七絶、本国禅林では十年の放浪を題したものとして更に著名であった。先述、瑞溪周鳳の七絶にも引用されている杜牧像である。そして十年の放浪――流落江湖の詩材を最も多く用いているのが南江なのである。

花下話舊　　南江宗沅

漂泊江湖吟思衰　　江湖に漂泊して吟思衰ふ
十年前叟只君知　　十年前叟只君知るのみ
綵禽蹴落燕支雪　　綵禽は蹴落とす燕支の雪
内藥每春銷幾詩　　内藥春銷きる毎に幾の詩ぞ

この七絶は、南江の詩集『漁庵小稿』に見える連作の一首である。漢詩の世界にあって「漂泊江湖」といえば当然、杜甫が連想されるはずであった。

關塞極天唯鳥道　　江湖滿地一漁翁　　（杜甫「秋興八首」七）

自らを、広大な江湖を漂泊する独漁翁に喩えたのは、老杜、夔州以後の辛い時代であった。しかし杜甫の漂泊は、

獨舟一繫故園心　　（杜甫「秋興八首」一）

ひたすら帰るべき故郷を求めての放浪であったのに対し、晩唐期の杜牧になると、老杜詩の影響を強くうけながら自らの旅を杜甫に比し、反芻し、自作の中に止揚することを得た。杜甫の反定立として、

官職を辞し扁舟に乗って去った范蠡の如き自由の境地を示す江湖も、当然杜牧の中で理解されていたはずである。そうした詩例を『三体詩』から一首あげておく。

題宣州開元寺水閣　杜牧

六朝文物草連空　天淡雲閑今古同
鳥去鳥來山色裏　人歌人哭水聲中
深秋簾幕千家雨　落日樓臺一笛風
惆悵無因見范蠡　參差煙樹五湖東

一連の南江の作でも杜甫の影響を受けていることは否定できない。しかしその詩句は小杜の詩情に重なるものの少なくない。それは南江が他の五山僧と異なり、自ら望んで実際放浪の経験を持ったことにも関連があろう。その羈旅の様は、江西龍派『續翠詩集』所収の律詩「謝南江上人見訪江州作」に詳しい。江西から南江への高い評価を裏付ける一作でもある。

流落江湖無定居　江湖に流落し居を定むる無く
每怜來慰夜燈孤　怜しく來る毎に夜燈の孤なるを慰む
人皆白眼君青眼　人皆白眼君青眼
昔曾南湖今北湖　昔曾て南湖今北湖
霞佩相追凌汗漫　霞佩相追ひて汗漫を凌ぎ
鉄心幾欲試崎嶇　鉄心幾か欲す崎嶇を試みんと
層雲何似酬高義　層雲何ぞ似たり高義に酬ふことに
風葉擁跌吟撚鬚　風葉跌を擁きて吟じて鬚を撚ず

こうした南江の漂泊の詩作で、杜牧の詩句に発想を得たものを更に二例あげておく。

五山詩壇で人口に膾炙したという「或寄帝需斎銘、序辞而還之」（『漁庵小稿』）詩の二三句、

十年疎懶硯吹塵　十年疎懶硯塵を吹く
江湖手熟釣竿雨　江湖手は熟す釣竿の雨

は『聯珠詩格』にも採られた「途中一絕」詩の転句、

惆悵江湖釣竿手

と。南江「辛未初春入觀心詠二十篇」（同右）の第一作の承句、

十年蓑笠舊生涯　十年蓑笠旧生涯

などは、小杜「齋安郡晩秋」詩の尾聯、

可隣赤壁爭雄渡　唯有蓑翁坐釣魚

の情景に非常に接近している。南江の好んで詠じた「漁翁」の姿は、禅林では普通、著名画題「寒江独釣図」を生んだ、柳宗元の五言絶句「江雪」によって解釈される。

江雪　柳宗元

千山鳥飛絕　萬徑人蹤滅
孤舟蓑笠翁　獨釣寒江雪

しかし、永州流謫中、時勢を堪え忍ぶ子厚の心情を具象した如き厳寒の漁翁は、漂泊とは対極に位置するものである。南江はこうした「漁翁」像も踏まえ、杜牧の描出した「漁翁」によったのではなかろうか。

南江の杜牧への思いは、一休の詩作によっても裏付けられる。『狂雲詩集』から南江に寄せた七絶をあげる。

寄南江山居

86天下禅師賺過人　天下の禅師人を賺過す
黒山鬼窟弄精神　黒山の鬼窟にて精神を弄す
平生杜牧風流士　平生杜牧は風流の士

吟断二番銅雀春　　吟じ断つ二番銅雀の春

転句以下、「赤壁」詩を材に杜牧に喩えたのは南江の杜牧嗜好を心得ていたこと、常に「風流」な詩情を持ち続けた牧之を例に、その放浪の生活を慰めたのであろうか。

南江に共通する江湖流落の詩題は一休にも数多い。「破戒」詩三首を引用しておく。

798 扶桑艶簡散文鮮　　扶桑の艶簡散文鮮し
吟杖清高雲月天　　吟杖清高雲月の天
流落江湖風雨枕　　江湖を流落す風雨の枕
詩情自折十余年　　詩情自ら折く十余年

799 飄零狂客也何之　　飄零狂客也何にか之く
十字街頭笛一枝　　十字街頭笛一枝
多病残生無気力　　多病残生気力無し
新吟慚愧老来詩　　新吟慚愧す老来の詩

800 悪詩題取記吾曽　　悪詩に題取して吾が曽を記す
儒雅風流破戒僧　　儒雅の風流破戒の僧
吟断十年樵屋底　　吟じ断つ十年樵屋の底
山林暗夜対残灯　　山林の暗夜残灯に対す

昔年の回想、十年の断吟という点で杜牧の前掲「遣懐」詩「題禪院」詩等の発想に酷似している。

杜甫、柳宗元や蘇軾も旅に死んだ文人として、強く詩情をかきたてた。大應・大燈両国師の二十年にわたる風飡水宿や、船子和尚・岩頭和尚らの事蹟も理解されていた。だが一休の流落江湖も漂泊のための落魄であり、そこには南江同様、杜牧詩の享受が大きな契機になっていたと思われる。

五

次に一休の杜牧詩享受の特異なものとして一例、題詠詩「瀟湘八景」詩の一作について触れておく。『狂雲詩集』には八景が一景につき二作ずつ、計十六首収められている。その中の「山市晴嵐」詩に杜牧詩の投影が見られる。

山市晴嵐

892 山頭紫陌俗塵紅　　山頭の紫陌俗塵紅し
鬧市忽々嵐際風　　鬧市忽々たり嵐際の風
商女休歌亡国曲　　商女歌ふことを休めよ亡国の曲
愛財家業興難窮　　財を愛する家業興窮まり難し

風光明媚な瀟湘近くの山市に、一休自身の眼前に広がる鬧々たる洛中の商市の光景を引導し、財を愛す商人の稼業を、名利に走る当時の五山僧への風刺、批判を込めて詠んだものである。一休作品の八景詩史上での独自性は、朝倉尚氏が既に言及されている。[12] この七絶では『三体詩』に収められた小杜「泊秦淮」詩を用い、新たな情景を作りだしているのである。

泊秦淮　　杜牧

烟籠寒水月籠沙　　夜泊秦淮近酒家
商女不知亡國恨　　隔江猶唱後庭花

転句「商女」は妓女、娼女のことである。杜牧詩では、妓女の声に感を発した詩人の心情、時の移ろいへの感懐に主眼が置かれている

のに対し、一休詩に取り入れられると、社会批判に重点がおかれ、表現も直截になっている。杜牧の憂国、悲憤の情を考慮して、このような転換を行ったのであろう。その意味でこの一休詩は、題詠ではありながら杜牧を賛する要素の強いことも窺える。

六

最後に、一休の実際の賛詩がいかなる形態であったのか――画賛であったのか否か――について簡単に記しておく。

希世霊彦『村庵藁』に「杜牧湖亭水嬉圖」という画賛が収められる。

杜牧湖亭水嬉圖　　希世霊彦

牧之双鬢未絲時　　牧之の双鬢未だ絲ならざる時
心是蛾眉非水嬉　　心是れ蛾眉にありて水嬉にあらず
湖面卻勝人面白　　湖面卻つて勝る人面の白きことに
恨君乞郡十年遲　　恨む君郡を乞ひて十年遅れしを

（『村庵藁』）

希世には度々朱批を加えた江西の「春湖水嬉」七絶（前掲）と同材である此詩、建仁寺両足院本『雪巣集』では、嘉吉元年の年記がある。将軍、足利義教が赤松満祐に暗殺された、いわゆる嘉吉の乱の起きた年である。事後、将軍継位に伴う五山住持の移動があり、『建内記』によると江西は南禅寺に入院している。[13] つまり五山内部でも大きな変動のあった年にあたる。そうした事情もあってか、記録類からこの二作の関連を探ることはできない。

この例からも杜牧が画題に取り上げられていた事実はあるものの、現在その構図を確認することはできない。管見では此の画題、希世詩に一首見えるのみである。或は江西も含むべきか。また前にも述べた如く、義堂の「墨竹」画及び南江の「茶園落花圖」も不詳である。これらの作にもまして一休の杜牧賛は、その内容に画師への配慮といった、多くの画賛に見られる絵画的側面の希薄なことから、具体的な絵柄は想定できない。

時代が降り横川景三や彦龍周興ら室町後期の詩僧には、呉興を詠んだ牧之に着目し、彼地の名跡「銷暑樓」を材にした「杜牧消暑樓」たる詩題も見える。しかし「杜甫騎驢圖」「東坡戴帽圖」等の如き確立した画題のなかったのは事実であろう。しかし画賛を否定する明確な傍証もない現在、今後更に新しい考察を俟たねばなるまい。

結

以上、幾つかの面から、一休の杜牧詩の受容と自作への利用について考察してきた。中国宋代において杜牧は実に多様に描かれ、多面な詩文を残した作家として理解されてきた。唐土の詩文論を好んで受容した本国ではその多彩さ故に同一性が確立されず、したがって賛詩の作製にも制約が生じたものと思われる。

そうした中で、一休は実に豊かな杜牧像を引出し、自らに引き合わせ発想を蓄積していった。一休にとって杜牧の多面性は理解し難いものではなかったのである。他の五山詩僧には見られない多くの賛詩はこうして生まれたといえる。だがかかる理解の礎となる大陸文学受容の面で、五山詩文壇、特に建仁寺霊泉院友社の江西龍派、或は南江宗沅らとの交渉が必要であったことも事実である。江西に

よって集成された杜牧像は南江や一休を通じ、より拡大されたのである。その意味で、五山文学史から一休を外し考えることはできない。その独自性は五山詩壇での裏付がなされ、初めて正当に理解されるのである。

一休の五山との交渉は、その解明を今後に俟つ所が大きい。更に異なる詩材、詩題を考察することにより文学的背景を究明していくことが、一休像解明のためにも重要な足掛となるだろう。

〔注〕

(1) 『狂雲集』本文は、伊藤敏子氏「考異狂雲集」（『大和文華』第四十一号　昭和三十九年）によった。作品番号も氏に従って附した。尚、「狂雲集　詩」部以降に含まれる詩については、稿中、便宜上『狂雲詩集』の名称で統一している。

(2) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』（思文閣出版『芳賀幸四郎歴史論集三』　昭和五十六年）

(3) (5) 同右

(4) 『一休宗純真蹟集』（講談社　昭和五十五年）所収「新修一休宗純年譜」（山田宗敏編）を参照した。

(6) 小西甚一氏「良基と宋代詩論」（『語文』第十四号　昭和三十年）増田欣氏「良基連歌論と詩人玉屑―字眼の説を中心として―」（『文学・語学』第二号昭和三十一年）

(7) 続群書類従本では下二句「儒雅家風無一點、詩情婬色紫雲前」になす。

(8) 『狂雲集』455（「東坡像」）832（「山谷像」）

(9) 『五山文学新集』第六巻「南江宗沅集」解題（東京大学出版会　昭和四十七年）

(10) 中本環氏「一休純と南江宗沅―一休の文学的環境・その一―」（『尾道短期大学研究紀要』第十六集　昭和四十二年）

(11) 『續翠詩藁』（『五山文学新集』別巻一）では「源京尹捐館后、過听松公作」との注記あり。希世霊彦『村庵藁上』（『五山文学新集』第二巻）にも「花下感舊贈松公嘉之明年春、江西・心田來訪」という七絶がある。江西の作もこの時のものと思われる。引用した七絶の契機に関して、「細川満元と北山文化」と題された米原正義氏の論攷がある。（『国学院雑誌』昭和五十四年十一月）

尚「岩栖」は東山の岩栖院鶴鳴庵で、希世の庵である。

(12) 『禅林の文学』（清文堂　昭和六十年）第一章・第一節。

(13) 『建内記』（『大日本古記録』三～十）嘉吉元年八月廿三日参照。

――大阪大学大学院博士前期課程在学――